二〇世紀前半イギリスにおける情報交換誌の役割
――『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌と南方熊楠を通して――

志村真幸

一　『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌におけるクエリーの位置づけ

南方熊楠が多数の英文論考を投稿したイギリスの『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌（以下、『N＆Q』誌）[1]は、文学、歴史、民俗学、語源学、地理学などを扱う総合文系学術誌（一八四九年創刊、週刊）だったが、その最大の特徴は読者同士の投稿による情報交換誌という点にあった。投稿にはノート、クエリー、リプライの三種類があり、誌面も三欄に分けられていた。ノートは「短報」で、現在の学術論文に近いものから、簡単な覚え書きまでさまざまである。クエリーは「質問」で、それに対して読者が返す「回答」がリプライとなる。

このうちクエリーは情報収集のために出されたものと位置づけられ、『N＆Q』誌が一九世紀後半～二〇世紀前半に百科事典代わりに使われた[2]性格を体現している。本稿ではこの情報収集の側面を分析していく。投稿者がどのような知識を求めていたかは、クエリーを読めばわかる。しかし、なぜそのようなクエリーを出したのか、また返ってきたリプライをどのように利用していたかは簡単にはわからない。とはいえ、『N＆Q』誌のような情報交換誌がイギリス社会で果たした役割を理解するには、この点を明らかにする必要がある。

これまでの研究で、クエリーを出した目的、得られた情報の利用について判明している例もいくつかある。たとえば、『OED』の編纂に際しては、編集者のマレーが『N＆Q』誌に大量のクエリーを出し、情報収集を行った。英単語の古い用例について求めるクエリーが出ると、争うようにリプライが寄せられ、採用されたものは実際に『OED』に載った。『OED』は『N＆Q』誌を利用し、その読者を大量動員してつくられたものだったのである。同様のことが『DNB』でも行われた[3]。これらの大辞書、大事典は『N＆Q』誌的な知的空間が生み出した最大の成果であり、投稿者たちがそれぞれのもつ知識を「実用化」させた機会ともなったのである。

そして前稿「南方熊楠は『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌をどのように利用したか?」では、熊楠の出したクエリーを取り上げ、何を質問したか、付いたリプライの内容、リプライを邦文論考にどのよう

に使用したか／しなかったかを分析した[4]。

本稿では、それに引きつづき、熊楠以外の投稿者によるクエリーを扱う。マレーのような組織的な例ではなく、個人を取り上げ、彼らがどのような目的でクエリーを出していたのか、得られたリプライをどう利用したか分析することで、『N&Q』誌がイギリス社会でもった意味が理解され、当時の知識や情報の伝達・流通にも光が当てられるだろう。

扱う論考は、熊楠に関わりのあった三件、すなわち一九〇七年にダグラス・オーウェンの出した「丸」、一九一五年にJ・P・ポストゲイトの出した「戦争における野生動物の使用」、そして一九一〇～二〇年代にA・S・E・アッカーマンの出した一連のクエリーを対象とする。一九一六年三月二四日の熊楠の日記には、「今日迄『ノーツ・エンド・キーリス』に出し予の題号特出条項」として、「1899? N. The Wandering Jew ／ 1900 R. Foot-Prints of Gods ／ 1904 R. Japanese Monkeys ／ 1907 N. Arrow-Breaking ／ 1907? R. Maru ／ 1911? N. Blindfolded Man ／ 1912 N. Whittington & his Cat ／ 1912 R. Legends of Flying ／ 1913 R. Double Flowers in Japan ／ 1913 N. Crab, the Pretended Astrologer ／ 1913 R. Cathedral Bell Stolen ／ 1914 Q. Dido's Purchase of Land ／ 1914 The Purchasing of Dreams ／ 1915 Theological Disputations by Means of Signs ／ 1915 Phosphorescent Birds ／ 1916 The Employment of Wild Beasts in Warfare」の一六篇が挙げられている。熊楠にとって印象深く、自信のあった論考と思われる。このなかに「丸」と「戦争における野生動物の使用」がふくまれているのである。さらに、この二篇はリプライとして書かれたものであり、オーウェンやポストゲイトのクエリーがなければ生まれなかった文章と言える。熊楠はのちにこれらを邦文にも書き改めているが、それらも書かれなかっただろう。そのことからも、取り上げる意味は大きい。

一方で、オーウェンやポストゲイトらが熊楠から得た情報の利用を明らかにすることは、熊楠のもっていた知識が西欧の学問世界において、確認され、使われ、継承されていく道筋をたどることになる。これまではコリングウッド・リーとの関係についてはよく知られていた[5]ものの、それ以外は断片的に判明しているのみであった。本稿は、熊楠の足跡を掘り起こす意義ももつ。また、アッカーマンとは書簡のやりとりもあり、この点についても触れることとする。

さらに、熊楠は『N&Q』誌に書いた自身の論考に、その前後のノート、クエリー、リプライ（熊楠以外の投稿者が書いたもの）の内容を盛り込むことで邦文化していた事実がわかってきている[6]。邦文「戦争に使われた動物」などに顕著なとおりである。そうしたことがイギリスで一般的だったか確かめるのも、本稿の目的となる。

二　ダグラス・オーウェン「丸」

ダグラス・オーウェンは、一九〇七年四月六日号で「事実上すべての日本の商船は、その名前に『丸』が付く。アメリカ丸、因幡丸、若狭丸といったように」[7]。そして、『ロイズ・レジスター』を見た印

象では九九パーセントの船に付いており、知人の日本人海軍士官や、また別の日本人紳士と食事したときにも訊いてみたところ、刀、犬、猫などに付けるが、英語では説明しにくいと回答された。さらに別の日本人にも尋ねたところ、「行く」「前に進む」を意味すると教えられたと述べている。しかし、それだけでは納得できなかったようで、「『N&Q』誌の読者で、こうした説明のどちらが正しいのか決定できる方はおられないだろうか。そして、もしどれも間違っているのなら、正しい歴史ないし語の意味を教えていただけないだろうか。おそらく投稿者・南方熊楠氏なら問題を解決できるだろう」[8]と質問を出した。

このクエリーに対して、まずは翌々週の四月二〇日号で、アマチュアの東洋学者だったジェイムズ・プラット・ジュニアがリプライを寄せ、チェンバレン『日本事物誌』に、船だけではなく、刀、楽器、武具、犬、鷹などにも「丸」と付くと出ていることを指摘した。

つづいて熊楠が八月一七日号、一一月九日号で二回にわたって返答することになる。日記から執筆過程を確認すれば、五月一一日の受信欄に、「April 6 の Notes & Queries 着、……Douglas Owen より予に舟の名 "Maru" のことをとふ」と記述があり、一三日には「朝図書館に之、舟の名に丸といふ字を調べる」と、さっそく論考に取りかかっている。その後は連日のように原稿を書き、六月一八日の発信欄に「ノーツ・エンド・キリス状一（一問三答也）……R. "Maru".」と他の三篇とともに投稿することになる。そして「丸」は八月一七日号に掲載された。九月一九日の受信欄で「八月十七日ノーツ・エンド・キリス着（予の答 "Maru" 出）」と確認した熊楠は二本目のリプライを執筆し、九月二六日に「ノーツ・エンド・キリス編輯人状一（……R. "Maru"）」と発信し、一一月九日号に掲載された。一二月一二日の日記の受信欄には「今日受るノーツ・エンド・キリス十一月九日分、予の文 "Maru" 出」と記されている。

さて、オーウェンは熊楠を名指しで質問したわけだが、彼がクエリー「丸」を執筆・投稿した一九〇七年三～四月という時期は、熊楠が数年ぶりに『N&Q』誌に復帰したタイミングにあたった。熊楠は一九〇四年四月一七日に Priest's Transmigration with Fungus（未掲載）など三篇を投稿して以降、ぴたりと執筆を停止してしまい、一九〇七年一月二二日に「船乗りシンドバッド――猿とココナツ」など四篇を投稿するまで三年近い沈黙をつづけたのである。しかし、この四篇のうちの「日本におけるイスラム教」が三月二日号に出てからは熊楠の論考が次々に誌面に載り、それを見たオーウェンがクエリーを出すことになったのであろう。

熊楠はリプライで、「進む」「参る」から丸になったというのは誤りだと指摘し、「大槻〔文彦〕『言海』（一五〇版、一九〇五年）によると、『まる』は『まろ』の変化したもので、『忠実であること』を意味する『ま』と助辞の『る』とからなる。つまり『誠実な者』の義であり、人名の最後に付けるのにふさわしい言葉と考えられるようになった」、「当初『まる』は話者自身をさす謙称であった……。また、謙遜の意味で、人名の最後に『まろ』または『まる』が多く用いられるようになった。やがて、次第に親愛の情を示す語となった。……また、日本刀は昔もいまも日本人にとって、みずからの命を護るためのもっとも

大切な武器なのだが、そのなかでもとくに価値のあるものには、小烏丸、鬼丸、友切丸など、個別の名が与えられた。その後、この語は親称から転じて敬称ともなり、男子の幼名の後ろに一般的につけられる称号となった」、「こうして、この言葉の歴史に照らせば、大型の船舶に『まる』の名が用いられたのも、万里の波濤を越えて航海する傑出した性能への、親しみを込めた尊敬の念に由来することが明らかである」[9]と説明している。

では、クエリーを出したオーウェンはどのような人物であったのか。

ダグラス・オーウェン（Douglas Owen, 1850-1920）はインナー・テンプル所属の海事法を専門とした法廷弁護士で、ポーツマスの王立海軍兵学校やロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの講師も務めた。*A Digest of the Law relating to Marine Insurance*（チャルマーズとの共著、一九〇一年）が加藤正道によって『英国海上保険法』（一九二一年）、*Ocean Trade and Shipping*（一九一四年）が斎藤恒太郎によって『英国海運通覧』（一九一九年）として邦訳されるなど、日本でも知られた人物であった。船舶・港湾史にも詳しく、『港としてのロンドン』（一九一二）、『船首像』（一九一三年）といった著作もある。確認できたかぎりでは、『N＆Q』誌に一九〇〇～一九年に四二本の投稿が出ている。海や船舶関連、また英語の言い回しに関するものが多い。

さて、今回の調査によって、熊楠のリプライは『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（第一一版、一九一〇～一一年）でオーウェンの担当した「海運 Shipping」の項に使われていることが判明した。この項の終わり近くに「極東でも海運における新しく重要な競合者が育ちつつあり、日本での産業・商業の発展にともなって商船が建造され、政府も莫大な出資をしている。すべての日本商船の名前には『丸』という語が付き、古代では男性の『謙称』だったが、現在ではおおよそ『最愛の』や『尊敬すべき』という意味で使われている」[10]と書かれているのである。ただし、熊楠の名前は出ていない。

古代には「謙称 humility」だったとする指摘がそのまま見られ、熊楠の使っている「親愛 endearment」と「尊敬 esteem」といった語も、dearest、esteemed として出ている[11]。これらの点からすると、オーウェンが熊楠の論考を事典執筆に利用したのは間違いないだろう。なお、前後の部分は、海運の技術や歴史、統計的データなどに関する記述で、「丸」にまつわる箇所は余談的に挿入されているように見える。

『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第一一版は、第一〇版（一九〇二～〇三年）から大幅に項目を改編し、執筆陣も一新して編纂されたものであった。クエリーを出した段階でオーウェンが執筆依頼を受けていたかは不明だが、該当箇所前後との違和感からすると、事典執筆のためにクエリーを出したというよりは、たまたま同時期に得た熊楠からの情報を盛り込んだと見なすべきかと思われる。

現在までの調査のかぎりでは、ほかの著作には「丸」関連の記述は発見できていない。

熊楠は『エンサイクロペディア・ブリタニカ』を愛用し、また『N＆Q』誌上では何回か日本関連の記述に誤りがあることを指摘しており、あるいは執筆依頼への期待があったのかもしれない[12]。その望

みは実現しなかったのだが、右記のようなかたちで、熊楠が提供した情報が『エンサイクロペディア・ブリタニカ』に載っていたことになる。ただし、熊楠がそのことに気付いていた可能性は低く、南方熊楠顕彰館に残る第一一版の該当箇所にも、書き入れ等は見られない。

しばらくたって、「丸」の件はさらなる展開を見せる。N・W・ヒルが一九一六年八月一九日号の『N&Q』誌に寄せたリプライで、自分が熊楠の文章をまとめなおし、海運日刊紙『ロイズ・リスト』（一九一六年六月一三日号）に転載したと報告したのである[13]。熊楠は驚き、一九一六年九月二〇日の日記に「今夕郵着八月十九日ノノーツエンドキリス 12 s.ii.146 ニヨレバ、N.W.Hill、海軍大将イングルフヰールドノ依頼ニヨリ、予ノ“Maru”（舟ノ称号）ノ説ヲマトメテ、Lloyd's List ニ出セル由ナリ」と書き込んでいる。文中にあるエドワード・フィッツモーリス・イングルフィールドは、現役の海軍提督であると同時にロイズの事務長を務め、『ロイズ・リスト』の編集長でもあった。しかし、この件の詳細はわかっておらず、新聞記事も未発見である。

なお、熊楠は「丸」にまつわる顛末を邦文で繰り返し発表している。「船名に丸字を加うること」（『日本及日本人』一九一二年七月一五日、八月一日）では、「これ毎々欧米人が本邦人に問うところにして、ロンドンにおいて発行する『随筆問答雑誌』、特に予を指名して弁明を乞われしより、去る四十年八月十七日と十一月九日の同誌においてこれに答えたり」と取り上げている。『紀伊新報』連載の「悪眼（イヴル・アイ）の話」（一九一二年九～一〇月）でも詳しく紹介している。『牟婁新報』掲載の「船名に丸の字を用る事」（一九一六年九月二六日）および「船名に丸の字を附る事に就て質問生に答ふ」（一九一六年一〇月三日）、また「履歴書」（一九二五年）でも発表の経緯を書いている。それだけ熊楠にとって思い入れの深い論考だったのであろう。

三　ポストゲイト「戦争における野生動物の使用」

つづいて、ポストゲイトの「戦争における野生動物の使用」（一九一五年八月二一日号）を取り上げたい。

J・P・ポストゲイト（John Percival Postgate, 1853-1926）は、ローマ期の詩人を専門とする古典学者であった。プロペルティウス、ルカーヌス、ルクレティウスらの研究に取り組み、翻訳も精力的に行っている。バーミンガム生まれ、一八七八年にケンブリッジのトリニティ・カレッジのフェローとなり、一九〇九年～二〇年にはリヴァプール大学のラテン学教授を務めた。一九二〇年に引退してケンブリッジに移り、一九二六年に自転車事故で亡くなっている。著作・翻訳が多数あるほか、『クラシカル・フィロロジー』誌に多数の論文を寄せ、また『クラシカル・レビュー』誌や『クラシカル・クォータリー』誌の編集にも携わった。『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（第一一版）では、「ルカーヌス」の項などを担当した。なお、『百万長者の死』のマーガレット・コール（夫のG・D・H・コールとの共著）、『十二人の評決』のレイモンド・ポストゲイトの推理小説家姉弟の父親としても知られる。

ポストゲイトが『N&Q』誌に記事を寄せたのは三回だけであり、「戦

争における野生動物の使用」は最初の投稿であった[14]。このテーマについて、「古代のものでも近代のものでも、その使用例を、どんな詩文であれ、教えていただければ幸いである。有名なのはルクレティウスのV巻一三〇二行にあるもので、（象のほかに）野牛、猪、ライオンが挙げられている」[15]と求めている。

これには九本のリプライが付いた。まず九月四日号でウェールズのアベリストウィス大学のエドワード・ベンズリーが、ルクレティウスよりも古い『ヒストリア・アウグスタ（ローマ皇帝群像）』の例、南アフリカ戦争でデ・ウェット将軍が牛の群れを用いて有刺鉄線を突き破った件、海賊のドレイク船長がスパニッシュ・メイン（カリブ海沿岸部）で野牛を用いた例を挙げた。九月一一日号ではH・I・Bが、イギリスはケルト人の時代から軍犬の産出で有名だったこと、また戦争での犬の使用をうたった詩を示した。そして一二月一一日号で熊楠が回答し、中国、インド、日本の文献を紹介し、『五雑組』から戚継光が猿を訓練して倭寇を撃退した例、『今昔物語集』や『十訓抄』にある蜂で敵を撃退した話などを挙げた。翌年一月二二日号ではふたたびベンズリーがリプライを寄せ、海賊の件はモーガンが一六七〇年にパナマでしたことだったと訂正し、原典からの引用を示した。一月二九日号ではR・J・フィンモアがカーター『戦争の珍品』に「戦いにおける動物」の章があることを知らせた。四月一五日号では熊楠が二本目の投稿を寄せ、鳥を集中的に取り上げ、ハイトンの『東洋あるいはタタール人の歴史』から鳥の飛び立つのを見て敵の接近を知った話のほか、ローマ、フランス、アラビアの例を引いている。さらに三本目の投稿である一二月二日掲載分では、ホッテントット族が戦争にバッケリヤーという牛を使う話を引き、その風習がいまでもあるのかと尋ねている。一九一七年一月一七日号ではN・W・ヒルがバッケリヤーについて詳述し、もう見られないと回答した。さらにだいぶあとの一九二五年六月一三日号でJ・アーダーが、ジョン・ランキングの一八二六年の著作に象などの猛獣を使った記録が出ていると知らせた。

このように非常に充実したリプライが出た背景には、前年に始まった第一次大戦でドイツ軍が軍用犬を組織的に使用し、数千頭のシェパードやドーベルマンを伝令、捜索、夜間警戒に用いたことがあるかもしれない[16]。

熊楠の執筆のようすは日記から詳細に確認できる。一九一五年一〇月二〇日に、「夜ノーツエンドキリスヘ状カク、……R: Employment of Wild Beasts in Warfare」とあり、二四日に「午後ノーツエンドキリスヘ状書ク、夜成ル、……ノーツエンドキリスヘ出ス答文、野獣ヲ戦争ニ用ル事、十種、引用書英一、和三、漢三、仏二、合計九種」、二五日に「ノーツエンドキリス編輯人状一（R: Employment of Wild Beasts in Warfare）発信」と発送している。そして一九一六年一月二三日に「本日着ノーツエンドキリス十二月四日分ニ予ノ問 Methods of awaking a Sleeper 及ビ予ノ答野獣ヲ戦争ニ用ルコトノ予告出ヅ」とある。このころの『N&Q』誌では、翌週号の主要記事が予告されていたのだが、編集部でもこの話題／熊楠に注目していたことがわかる。そして一月二八日に「本日着十二月十一日ノーツエンドキリスに

予の答 Wild Beasts employed in Warfare 出づ」と掲載を確認した熊楠は続編を書き始め、二月二日に「午後ノーツエンドキリスへ状カク、夜湯ニ之、床力ニ遊ビ、帰テ又カク、Wild (Birds) Availing in Warfare 書終ル」と完成する。翌三日の発送に際しては「ノーツエンドキリス編輯人状一（N.Wild Beasts availing in Warfare. 発信」とややタイトルを変え、またリプライではなくノートとして投稿した。しかし、五月二一日には「今朝着ノーツエンドキリス四月十五日分ニ予ノ答文、Employment of Wild Animals in Warfare 出ヅ」とあり、誌面を確認しても、'Employment of Wild Animals in Warfare' のタイトルで、リプライとして出ている。編集部が議論のつながりを重視し、リプライとして扱ったのだろう。

一〇月一〇日には邦文に直す作業を始め、「終日太陽投書ノシラベス、夜ヨリ起稿ス、題ハ『戦争ニ使ハレタ動物』也」とある。さらに一四日には「ノーツエンドキリス編輯人ハ一（R：Wild Beasts employed in Warfare.）発信」と書かれている。『太陽』のために材料を調べるなかで新発見があり、改めて投稿したのだろう。これも微妙にタイトルが異なっているが、誌面にはリプライ 'Employment of Wild Beasts in Warfare' として掲載された。タイトルが微妙に違っているが、このような例は多い。邦文論考のほうは一〇月二九日に「原稿カキ了リ、午後出ス。／戦争ニ使ハレタ動物原稿凡テ二十四字二十行ノ紙六十六枚ト数行、引用書百二十一種、和四四、漢二四、英四三、仏七、拉二、西一、計一二一」となる。一本目の英文には九種類しか文献が使われていなかったことからすると、驚くほどの拡充ぶりである。よほど熊楠の執筆意欲を刺激したテーマだったのだろう。

さて、ポストゲイトは得られたリプライをどのように利用したのだろうか。

クエリー投稿から約一〇年後の一九二六年に書かれた論文「ルクレティウスへの新しい光」で、この話題が取り上げられている。一九二五年一一月一一日にマンチェスターのジョン・ライランズ・ライブラリーで行われた講演を、翌二六年一月発行の『ジョン・ライランズ・ライブラリー紀要』（一〇巻一号）に掲載したものである。

この論文では、ルクレティウスの詩における、野生動物の戦争への使用について論じられている。ルクレティウス（紀元前九九年頃～五五年）は共和制ローマ期の詩人で、その『物の本質について』（V巻）の一三〇二行以下に「牛たちもまた戦いのなかで恐ろしい仕事をさせられた。猪も敵に対して差し向けられたという。そして戦列の先頭には猛々しいライオンが配置され、武装した調教師と猛獣使いたちが御し、鎖を取った……」[17]とある。この箇所を引用したうえでポストゲイトは、「ルクレティウスの第五書に見られる『戦争における野生動物の使用』は、この詩における無用の長物である。この箇所なしでも完全なはずの詩の適切な流れを邪魔しており、整合性からも外れている。実際には出典となったものは確定できず、より古い詩人の言説も知られていない。……その構成、スタイル、語法はまさしくルクレティウスのものであり、しかし、まったくふだんのルクレティウスらしくない」と述べ、最後に「この問題については次の機会にまわしたい」[18]としめくくっている。しかし、ポストゲイトはこの年に事故

死してしまい、研究に結末を付けることはできなかった。

ポストゲイトはこの箇所がルクレティウスらしくないと感じ、より古い文献からの引用や混入ではないかと疑っていたのである。そのため『N&Q』誌にクエリーを出したのだが、求める情報は得られず、その後の研究でも発見できなかったようだ。

しかし、まったくリプライが無駄になったわけではない。ベンズリーが指摘したカリブ海賊の例が、原典にさかのぼって引用されているのである[19]。ただし、ベンズリーの名前は出ていない。そのほか、ラムセス二世がライオンを使った例、一八七〇年の普仏戦争時にパリでドイツ軍に動物公園の猛獣をけしかける計画があったことも述べられているが、これらはリプライからのものではなく、ポストゲイトが『N&Q』誌以外からも情報収集していたことがうかがわれる。

「ルクレティウスへの新しい光」では、熊楠の名前はもちろん、彼が挙げた日本や中国の事例もまったく取り上げられていない。ポストゲイトの主目的はルクレティウスより古い例があるか確かめることにあり、東洋の事例は関心の埒外だったのであろう。とはいえ、ずっとのちの普仏戦争の話は書かれているのだが。

熊楠が『太陽』に発表した「戦争に使われた動物」（一九一六年一二月）は、英文の一本目と二本目をもとに執筆したもので、自身の論考の内容にくわえ、ポストゲイトのクエリー、ベンズリーらのリプライも取り込んで書かれた長大な論考であった。その冒頭付近には、「予昨年十二月と今年四月の同誌〔『N&Q』誌〕に二篇の答文を出だし、第一には人が故と謀って諸動物（主に鳥獣、そして牛馬等の知れきった例を除く）を軍事に使ったことを論じ、第二にはそう決著に特に使われたでなく、ありあわせた動物が戦争中の人間を偶然利益し、扶助し、もしくは敗亡せしめた例を説いた。爾後もおいおい材料が集まったから、件の二文を合わせた上、大いに増補して御覧に入れる」[11]とある。

ポストゲイトが質問しなければ、熊楠が英文'Employment of Wild Beasts in Warfare'を書くことはなく、もちろん邦文「戦争に使われた動物」も生まれなかっただろう。ただ、この時期に熊楠は毎年『太陽』に「十二支考」を寄稿しており、ずっと動物の話を探していたので、ネタ自体は集まっていたと思われる。それがポストゲイトの質問で触発され、英文としてまとめられることになった。さらに、他の投稿者と競い合うように投稿を繰り返すなかで国際的な広がりのある重要なテーマだと気付き、邦文化したのだと思われる。『N&Q』誌に書くことが、熊楠にとってそれ自体が国際的な活躍として意味深いものだったのは間違いないが、同時に誌面の質疑によって執筆意欲をかきたてられ、新しいテーマに取りかかるきっかけにもなっていた。そして英文を発表したあとには、誌上での質疑から必要な知識を取り込み、自身のもつ情報と総合することで邦文論考へと仕上げていたのである。

四　アッカーマン『ポピュラー・ファラシーズ』

A・S・E・アッカーマン（Alfred Seabold Eli Ackermann, 1867-?）は、ロンドン在住の、エンジニア・ソサエティに所属する技術者であった。熊楠への書簡には「コンサルティング・エンジニア」と記されており、その余暇を使ってのアマチュア民俗学者だったようである。一九〇七年に『ポピュラー・ファラシーズ』を出版、一九〇九年、一九二三年、一九五〇年にも増補改訂版を出している。そのほか『ベーコンとシェイクスピア』（一九二一年）などの著作があり、『ネイチャー』誌にも建材としての泥の性質についてのノート（一九一九年三月二七日号）など数本を寄せている。『N＆Q』誌には一九一五～四八年に約二三〇本の投稿が出ている（初掲載は後述の「猫の質問」）。

主著『ポピュラー・ファラシーズ』は、世間で広く信じられている誤謬や迷信を取り上げ、ただすことを目的とした本であった。一九二三年の三版の序文には、「間違いではないかと疑い、それについて調べるだけの時間と方法がある場合はいい。それはけっこうなことだ。しかし、一般に言われていることにまったく疑いを抱かず、真実ではなく誤ったことを信じてしまうことがある。そこで、本書には二つの目的がある。読者に世のなかで言われているのとは違うことがたくさんあるのに気付いてもらうこと。誰かが何らかの疑問をもったときに参照してもらい、膨大な時間をかけて必要な情報を探すような手間を省いたり、あるいはどこを探せばわからないようなときにも利用してもらうこと」[21]とある。

たとえば、「動物」の章の最初の項では「狂犬は水を避ける。『ドッグ・デイズ』と呼ばれる日には、他の期間よりも狂犬になりやすい」という誤解を取り上げ、実際には狂犬も水を飲んだり泳いだりすることを示している[22]。あるいは、「天気」の最初の「セント・スウィシンの日（七月一五日）に雨が降り出すと、四〇日間止まない」という迷信に対しては、過去の天候の記録を示して、そんなことはないと否定している[23]。かならずしも迷信や民間信仰だけではなく、「エジソンは電話の発明者ではない」、「救貧法の始まりは一六〇一年エリザベス法ではない」、「しろめは鉛とは別の金属である」など、ちょっとした誤解や歴史的・科学的な事実の誤りなども扱われている。

アッカーマンはこうした誤謬の収集に熱心で、一九〇七年版では四六〇件・三一二頁、一九〇九年版で四六〇件・三四五頁（各項目に増補）だったものが、一九二三年の三版では一三五〇件・九八四頁と大幅に頁数が増えており、実際に内容を見てみても項目、テーマ、事例ともに増加している。一九五〇年の四版では項目数は増えず、各項目に加筆がなされた（八四三頁）。

三版に向けては、早い時点から改訂の意図があり、一九一五年頃から『N＆Q』誌にさかんにクエリーを出している。これらのクエリーに熊楠は何度もリプライを寄せ、やがて書簡のやりとりにも発展した。細かくなるが、以下にアッカーマンと熊楠のやりとりについてまとめておきたい。

現在、南方熊楠顕彰館にはアッカーマンからの五通の来簡と、『ポピュラー・ファラシーズ』（一九〇九年版）、寄贈された雑誌・抜冊が

所蔵されている。

一九一九年一一月一五日付の来簡は、熊楠が第三版をアッカーマンに注文した[24]のに答えた書簡[25]であり、「『ポピュラー・ファラシーズ』／右記の第三版をご注文いただき、まことにありがとうございます。不幸にもまだできあがっていないのですが、原稿は一ヶ月ほど前に完成しており、第二版では四六〇件に過ぎなかったのが、約一五〇〇件の迷信を扱っています。一五〇〇件のうちのその四六〇件についても大幅に書き直し、事例を加えています」[26]とある。しかし、厚くなりすぎ、出版社が出し渋っていると述べ、「ご注文を約束して下さったにもかかわらず、まことに申し訳ないのですが、まだ刷り上がっていないのは事実で……」と出版の遅れを謝罪している。

裏面では、「まだ原稿で扱っておらず、書き上げていない迷信についてご助力いただけないでしょうか。……多くの問題のうちいくつかには、もっと情報が必要だと感じているのですが、『N&Q』誌などにも出ていないものがあるのです。日本で信じられている迷信について教えていただき、一覧にくわえることができれば……」と情報提供を頼んでいる。一〇点の質問が別紙で二枚にわたって書かれており、「一、中国女性は足をどうやって小さく保っているのか。また、その目的は何か[27]」「一〇、毛皮の衣類は毛を外側ではなく、内側にすると温かいとされるが、いくらかでも信憑性があるのか。また、その理由は何か」といったものが並んでいる。一点目だけが中国に関する質問で、あとは一般的な問題、もしくはロシアやオーストラリアに関するもので、日本に関する質問はふくまれていない。なお、日記を確認したかぎりでは、熊楠は返事を書かなかったようである。

また、一九一九年一一月一九日付の請求書が残っており、『ポピュラー・ファラシーズ』（一九〇九年版）の値段が七シリング六ペンスだったことがわかる。本そのものには「大正九年一月八日著者より郵着紀伊国田辺町南方熊楠蔵書」と熊楠の手で書き込みがなされている。どうやら、アッカーマンの投稿を見て第三版がもう出たものと思った熊楠が注文を出し、アッカーマンがともかく手元にあった第二版を送ったというのが経緯らしい。なお、このとき雑誌『エンジニアリング・アンド・インダストリアル・マネージメント』（新シリーズ、二一号）も送られている[28]。

二通目の一九二〇年三月五日付の来簡[29]では、一九二〇年二月二五日に熊楠からの葉書が届いたと述べている。そして出版の見込みが立たないことを再び謝り、一九一九年の『エンジニア・ソサエティ紀要』（一〇巻二号）に出た論文「粘土の積層時の実験」の抜刷を送るとしている[30]。なお、この論文でアッカーマンはエンジニア・ソサエティのゴールド・メダルを獲得している。抜刷も現存しており、表紙部分に「大正九年四月廿三日 著者より郵着 寄贈 南方熊楠」と書き入れがある。

三通目の一九二三年七月三一日付の来簡では、熊楠が何年か前に『ポピュラー・ファラシーズ』を注文したことから語りはじめ、第三版の出版の見込みがいまだ立たないこと、いくらか減らして一三五〇件を収めることを示し、「私がこの手紙を差し上げたのは、あなたに次のようなことを判断していただきたいからです。九月末までには出版契

約が結べそうなのですが、本が完成したときに、書評を書いてもらうために一冊か二冊を日本へ送る価値があるでしょうか。また、そのあとで東京の出版社のどこかに注文を出してもらうよう話を付けられないでしょうか」と依頼し、「『N＆Q』誌にときどき出るあなたの寄稿を興味深く読ませてもらっています」[31]と結んでいる。これについては、一九二三年九月五日の日記の受信欄に、「A.S.E. Ackermann, M. Victoria Street. Westminster, London 状一（著者ポピュラー、ファラシース三板出スニ付テ日本ノ新聞紙デ批評ヲ乞フトノコト也」とある。

そして、一九二三年一〇月六日に、ようやく『ポピュラー・ファラシーズ』第三版が出版されることになる。

四通目の一九二四年七月三日付の来簡[32]では、第三版第二刷が刷り上がったことに触れたのち、『ネイチャー』誌の記事を読んで、日本人が洋書を大量に購入していることを知ったのだが、東京など主要都市の書店で販売できないかと尋ねている。内容見本（技術者用と一般読者用の二種類）を同封のうえ、東京等への郵送費代わりのクーポンも四枚同封したようだ[33]。しかし、熊楠がアッカーマンの頼みをきいたようすはない。

最後の一九三四年一月一一日付[34]では、「だいぶ以前のことになりますが、一九二七年二月一九日号の『N＆Q』誌の一四〇頁で、あなたから迷信に関する文献を教えてもらったことがありました……」、しかし、それらの文献がどうしても見つからず、タイトルが間違っている可能性もあるので、「『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第一一版の記述も訂正の必要がある」としている。さらに現在では迷信の数が二五〇〇件を越えたこと、いくらでも迷信が見つかること、『サンデー・ピクトリアル』誌から『ポピュラー・ファラシーズ』の簡略版が出ることに触れている[35]。

このなかで言及のある、迷信に関する文献の件とは、アッカーマンが迷信に関する参考文献を要請したクエリー「迷信――参考文献」（一九二六年一一月二七日号）に、熊楠が「アッカーマン氏の一覧に、〔ベニート・フェイホー〕『世界学芸の総批評』（マドリッド、一七二六―一七三九年）と『博識奇譚』（同、一七四二―一七六〇年）をくわえさせていただきたい。ただし私自身はいまのところ部分的にしか読んでいない。詳細については、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（第一一版、一〇巻二三七―二三八頁、〔「ベニート・ヘロニモ・フェイホー・イ・モンテネグロ」の項〕）と、〔ミショー〕『世界の伝記今昔』（パリ、一八一五年、四七六―四七七頁）を参照のこと」[36]（一九二七年二月一九日号）とリプライを出したことを指す。

さて、前述のようにアッカーマンは『ポピュラー・ファラシーズ』のために繰り返しクエリーを投稿しており、熊楠がリプライを返した話題も一三件にのぼる[37]。「猫の質問」（一九一五年九月四日号）に熊楠は「猫のフォークロア」（一九一六年三月二五日号）としてリプライ、「ニワトコのフォークロア」（一九一五年一一月六日号）にリプライ（一九二一年一月一日号）、「フォークロア――横断の危険」（一九一五年一二月一一日号）にリプライ（一九一六年三月一八日号、一九二〇年六月二六日号）、「屋敷と庭にまつわる迷信」（一九一六年七月二九日号）にリプライ（一九一六年一一月一八日号）、「フォーク

ロア――赤毛」（一九一六年八月一二日号）にリプライ（一九一六年一一月四日号）、「未開人の視力」（一九一六年一一月一八日号）にリプライ（一九一七年三月三一日号）、「火を消す火」（一九一六年一二月三〇日号）にリプライ（一九一七年六月号）、「潜水艦」（一九一七年七月号）に「潜水艦――装甲艦」／「潜水艦」（一九一八年四月号、一九一九年五月号）としてリプライ、「鳥が捕まってしまったひなを毒殺する」（一九一九年八月号）にリプライ（一九二〇年二月号）、「コウモリ――髪の毛」（一九一九年八月号）にリプライ（一九二〇年六月五日号）、「米」（一九二一年五月一四号）にリプライ（一九二一年八月二七日号）、「鷲にさらわれた子ども」（一九二二年一〇月七日号）にリプライ（一九二三年二月一七日号、一二月八日号）、「迷信――参考文献」（一九二六年一一月二七日号）にリプライ（一九二七年二月一九日号）がある。

本稿では「猫のクエリー」と「潜水艦」から、『ポピュラー・ファラシーズ』への利用について分析したい。

『N&Q』誌面ではしばしば猫に関する迷信や言い伝えが議論となったきたが、このときはアッカーマンが猫に関する五つの質問を出したことで、翌年一月一日号まで活発にやりとりが行われ、リプライは二一本にもなった。五つの質問とは、一、猫は飼い主より家に付くというのは本当か。二、仔猫の手の先にバターを塗ると新しい家から迷い出ないというが本当か。三、蠅を食べた猫が痩せるというのは本当か。四、三毛猫はすべて雌か。その理由は何か。五、白猫は耳が聞こえないというのは本当か。その理由は何か[38]であった。

『ポピュラー・ファラシーズ』の「動物界 哺乳類」の章には、「猫はつねにひとより家に付くとされる」、「猫は蠅を食べると痩せる」「白猫は耳が聞こえず、赤い眼をしている」「猫の手の先にバターを塗れば、新しい家から迷い出ない」と五つの項が並んでいる[39]。各項の中身は『N&Q』誌に寄せられたリプライの抜き書きとなっており、誤っているとする根拠・事例が示されている。たとえば、「猫はつねにひとより家に付くとされる」では、アドルショウ、プラット、ラトクリフ、ニューマンのリプライから抜粋されている。氏名、『N&Q』誌の掲載号や頁もきちんと書かれている。

そして「潜水艦が近代の発明だということ」の項では、ベーコンの『ノヴム・オルガヌム』（一六二〇年）に潜水艦の発明の記述があることに触れ、「筆者がこの引用を『N&Q』誌に掲載したところ、南方熊楠が寄せた長い投稿が一九一八年四月号の一一二頁に出た。そのなかで彼は『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（第一一版、二四巻九一七頁）に、潜水艦の最初の確実な成功は一七七五年にアメリカでブッシュネルによって成し遂げられたと書かれていることを示した」[40]と簡潔に紹介している。ただし、熊楠が『N&Q』誌へのリプライでつづけて述べた、大坂冬の陣で徳川家康が九鬼守隆に命じてつくらせた四隻の「盲船」（「配下の兵を乗せ、堀のなかを潜水して進み、大砲を撃って櫓を破壊した」）[41]については触れていない。その次のインドネシアのダヤック族の「鉄船」（これについては熊楠も実在を否定している）のことも出ていない。なお、この項には『N&Q』誌以外からの事例も示されている。

『ポピュラー・ファラシーズ』で熊楠の名前を確認できたのは、この箇所だけとなる。右記の二件以外でも『N&Q』誌からの引用は無数にあり、またアッカーマンのクエリーに熊楠が熱心にリプライを寄せていたことからすると、いささか不思議に思われる。しかし、これは熊楠にむしろ誤謬を肯定するような投稿が多かったからかもしれない。たとえば、「鳥が捕まってしまったひなを毒で殺す」では、「そんなことがあるのか」という質問に、「ある男が見つけた燕の巣では、これといった原因も見当たらないのに、すべてのひなが死んでいた。しかし、よく調べてみると、どのひなも口のなかに麦の禾や松葉が詰めこまれていた。実はひなたちの本当の母鳥が死んでしまい、継母となった鳥が窒息死させたのであった（寺島〔良安〕『和漢三才図会』一七一三年、四二巻）」と回答している[42]。「鷲にさらわれた子ども」でも、「鷲が子どもをさらった確かな例はあるか」という質問に、「鷲以外の猛禽類が子どもを連れ去って育てることについての東洋の伝説を、私は最近二つ見つけた……」[43]と回答している。このように熊楠のリプライは、誤謬を正すというアッカーマンの目的にはそぐわず、ほとんど収録されなかったのだと思われる。

なお、熊楠は『ポピュラー・ファラシーズ』の第三版を目にしていないようである。顕彰館には所蔵されておらず、日記等にも記録が見られない。おそらく熊楠は自分の名前が出ていることを知らなかっただろう。

リプライを返した一三件のうち、熊楠が邦文にしているのは、実は「潜水艦――装甲艦」と「鷲にさらわれた子ども」の二本のみとなる。実は「潜水艦――装甲艦」は、一九一七年四月一日の『日本及日本人』に発表した「潜水艇」を英文化したものであり、さらに英文掲載後の一九一八年九月一五日号に出た邦文「潜水艇 追記」では、ベーコンの記述と大坂冬の陣での記録を対照し、「しからば東西万里を隔てて、ほとんど同時にこの種の船が初めて出たのだ」[44]としている。この「潜水艇 追記」で取り上げた晋の王嘉について投稿したのが英文の二本目となる。「鷲にさらわれた子ども」は、「孕石のこと」（一九二〇年一二月）、「鷲石考」（一九二六年九月）、「額より妙相を現ぜしこと」（一九三一年一一月）に一部が使われている。

おわりに

本稿の収穫は、まず第一に、熊楠がリプライで提供した情報が、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』と『ポピュラー・ファラシーズ』に使われていたことの発見である。熊楠の『N&Q』誌への投稿は、イギリス人によってきちんと利用されていたのである。

そしてオーウェン、ポストゲイト、アッカーマンのクエリーについて見ることで、『N&Q』誌における情報収集法について、いくつかの事実が明らかになった。

ひとつはクエリーを出した目的である。ポストゲイトとアッカーマンは明確な必要があって情報を求めていた。ポストゲイトは研究中のルクレティウスの疑問点について、アッカーマンは『ポピュラー・ファラシーズ』のためにクエリーを出したのであった。

つづいて、得られた情報をどのように利用しているかをみると、三者とも著作に使っている。オーウェンは『エンサイクロペディア・ブリタニカ』に書き、ポストゲイトは「ルクレティウスへの新しい光」に盛り込み、アッカーマンは『ポピュラー・ファラシーズ』に用いた。リプライは放置されることなく、しっかりと本や文章になっていたのである。ただし、文章化するまでには、かなり時間がかかっている。とはいえ、ポストゲイトの場合はいちばんほしかった情報が得られず、アッカーマンはなかなか出版にこぎつけられなかったという事情がある。むしろ、すぐに利用するのではなく、何年もかかるのがふつうだったと位置づけるべきかもしれない。熊楠の場合にもクエリーを出してから邦文化まで相当な時間差があること[45]への示唆ともなろう。

さらに、三者とも『N&Q』誌以外の出典も使っており、さまざまに存在する情報収集手段のひとつだった点にも注意すべきであろう。他の手段との比較は今後の課題となる。

情報提供者の名前を出すか否かについては差がある。オーウェンとポストゲイトは出さず、アッカーマンは明記している。熊楠の邦文では、出すケースと出さないケースがある。ポストゲイトの場合は教示された原典から引用しており、ベンズリーの名を出さなかったのも、情報のありかを示した人物に過ぎないと思っていたからではないか。

もうひとつ触れておくべきは、ポストゲイトとオーウェンが熊楠の寄せた東洋の知識を使っていない点である。イギリス人である二人にとって不要だと思われたのか、不確かな情報とみなされたのか。熊楠が『ネイチャー』誌や『N&Q』誌で活躍できたのは、中国や日本の事例に通じていたからだと考えられていることと合わせて検討する必要があるだろう。

情報交換誌である『N&Q』誌と、そこに寄せられた知識は、このようなかたちで利用されていた。投稿者たちは出したクエリーに付いたリプライを研究や著作に用い、あるいは熊楠のように質疑を通して執筆活動を進めるなどして、『N&Q』誌から多くの成果が生み出されていたのである。

注

（1）テクストは『N&Q』本誌、オンライン版、平凡社版『南方熊楠全集』、邦訳『完訳 南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』（飯倉照平・志村真幸・田村義也・中西須美・前島志保・松居竜五訳、集英社、二〇一四年出版予定）を用いた。タイトルや人名の表記、熊楠論考の本文は邦訳に従った。……は省略、〔〕は補足を示す。

（2）拙稿「『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌と大辞典の時代―『オックスフォード英語大辞典』、『イギリス人名事典』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』と南方熊楠」『歴史文化社会論講座紀要』八巻、二〇一一年。

（3）同、九七～一〇一頁。

（4）拙稿「南方熊楠は『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌をどのように利用したか？―邦文論考との関係から」『歴史文化社会論講座紀要』一〇巻、二〇一三年。

（5）拙稿「南方熊楠と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌―'Footprints and Gods, &c.' から「ダイダラホウシの足跡」へ」『ヴィクトリア朝文化研究』七巻、二〇〇九年。

（6）『南方熊楠大事典』勉誠出版、二〇一二年、五七一頁。

(7) Douglas Owen, '"Maru",' *N&Q*, April 6, 1907, p. 268.
(8) *Loc. cit.*
(9) 『南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』第Ⅲ章収録。
(10) *Encyclopaedia Britannica*, 11th ed. vol. 24, 1911, p. 986.
(11) なお、プラットも endearment の語を使っている。
(12) 前掲「『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌と大辞典の時代」一〇四頁。
(13) N. W. Hill, '"Maru",' *N&Q*, Aug. 19, 1916, pp. 146-147.
(14) 残りの二篇はノート 'Sors Iernica' とクエリー 'Wringing the Hands'（いずれも一九二一年六月一一号）。'Sors Iernica' は同時代のアイルランドの状況をラテン語の対句であらわしたもの。'Wringing the Hands' は、D・G・ロセッティの詩にある言いまわしについて尋ねたものであった。
(15) J. P. Postgate, 'Employment of Wild Beasts in Warfare', *N&Q*, Aug. 21, 1915, p. 140.
(16) Michael G. Lemish, *War Dogs: A History of Loyalty and Heroism*, Brassey, 1999.
(17) J. P. Postgate, 'New Light upon Lucretius', *The Bulletin of the John Rylands Library*, v. 10, no. 1, January, 1926, p. 143.
(18) *Ibid.*, p. 149.
(19) *Ibid.*, pp. 140-141.
(20) 南方熊楠「戦争に使われた動物」『全集』三巻、一九七一年、一一四〜一五七頁。
(21) A. S. E. Ackermann, *Popular Fallacies*, 4th.ed., Westminster Press, 1950, p. v. に再録。
(22) *Ibid.*, p. 193.
(23) *Ibid.*, pp. 737-739.
(24) 『N＆Q』誌への投稿でアッカーマンはしばしば出版間近と語っていた。なお、九月三〇日の日記にアッカーマンへ注文の葉書を出したことが記録されている。
(25) 熊楠の日記からは一九二〇年一月九日に届いたことがわかる。
(26) 南方熊楠顕彰館所蔵資料〔来簡０００１〕。
(27) このテーマについては中国人の著作を典拠として、*Popular Fallacies* の五五七頁で取り上げられている。
(28) 熊楠の日記からは、この二冊が一九二〇年一月八日に届いたことがわかる。「受信 A. S. E. Ackerman 'Popular Fallacies Explained & Corrected', 1909, 及ビ Engineering & Industrial Magazine　一九一九年十一月二十日号」。アッカーマンの名と雑誌タイトルを誤記している。代金は一月一〇日に送っている。
(29) 一九二〇年四月二二日着。
(30) 〔来簡０００２〕、一九二〇年四月二三日着。
(31) 〔来簡０００５〕。
(32) 一九二四年八月二日着。
(33) 〔来簡０００３〕。
(34) 一九二四年二月九日着。
(35) 〔来簡０００４〕。
(36) 『南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』第Ⅸ章収録。
(37) なお、南方熊楠顕彰館に残る『N＆Q』誌の調査では、アッカーマンのクエリーに熊楠はまったく書き込みをしていないことがわかっている。
(38) A. S. E. Ackermann, 'Cat Folk-Lore', *N&Q*, Sept. 4, 1915, p. 183.
(39) Ackermann, *Popular Fallacies*, pp. 210-212.
(40) *Ibid.*, p. 544.
(41) 南方熊楠「潜水艇」『全集』五巻、一九七二年、三四六頁。
(42) 『南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』第Ⅵ章収録。
(43) 同、第Ⅶ章収録。
(44) 南方熊楠「潜水艇」『全集』五巻、三四六頁。
(45) 前掲「南方熊楠は『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌をどのように利用したか?」